文化 Culture

内容濃密「最も成功した大会」

サウル国際ペン会長

境と文学」など2世紀文学のテーマ性の高い大きな主題であることを全身で感じさせた。

さらに、一般客にひらかれた六つの文学フォーラムやセミナーも入場無料で開催。早大大隈講堂で行われたフォーラムは、ナイジェリアやシリアなど日本では比較的なじみの薄い作家を招いた。スクリーン映像や音楽、墨絵パフォーマンスなどを交えた朗読

国際色豊かな開会式の参加者たち（26日、大隈講堂で）

文学フォーラムで、サラ・パレツキーさんの『沈黙の時代に書くということ』を朗読するアナウンサーの山根基世さん。米国の片田舎に生まれ、学生運動に揺れた1960年代の大学時代に自由に目覚めた少女の姿に、聴衆も心を打たれた（23日、東京・新宿区の早稲田大学大隈講堂で）＝冨田大介撮影

「これまでで、最も成功したペン大会だ。参加した国や地域のセンターの数は最多だった」

今大会について、ジョン・ラルストン・サウル国際ペン会長＝写真＝は感想を述べた。

これほど内容の詰まった文学関連行事が続いた大会は少ないという。総会で、国際ペンのナンバー2である専務理事に堀武昭さんがアジアから初めて選ばれたのも、大会運営の評価があってのことだ。欧米志向の強い組織で、アジアの文学者の声をどう届けていくのか手腕に期待したい。

東京での国際ペン大会は約四半世紀ごとに行われ、時代に合ったテーマ設定が行われてきた。1957年の「東西文学の相互影響」、冷戦下84年の「核状況下における文学」。今回の「環境と文学」も地球温暖化や生物多様性の劣化が問題となる中、漠然とはしていたが、現代を象徴するテーマだった。

一方で課題も残った。84年の大会には、当時の日本ペン会長・井上靖や遠藤周作、野間宏、桑原武夫ら国内から多くの文学者が顔をそろえた。だが今大会は、日本の作家の参加はやや少なく見えた。

多様な価値観がある中で、文筆にかかわる者の連帯のあり方が今後、問われるだろう。

日本ペンクラブが環境文学リスト

今回の大会に合わせ、日本ペンクラブの環境委員会は「環境文学リスト」の小冊子を作成した。小説・物語・戯曲、児童文学、哲学・ノンフィクションなど、詩歌・俳句の4部門で、明治以降の作品を選定した。

小説部門は100作。泉鏡花の『高野聖』や国木田独歩『武蔵野』から日野啓三『夢の島』まで幅広く、宮崎駿の『風の谷のナウシカ』などの漫画も含んでおり、興味をそそる内容だ。

■意気込む吉右衛門　歌舞伎俳優